

生物多様なごや戦略 第4回策定会議（要点）

日時:平成21年10月1日(木) 15時00分～17時30分

場所:名古屋市公館1階

出席者:

< 策定会議委員 >

氏名	専門家会議	しみん検討会議	所属・役職等	出欠
安田 喜憲	座長		国際日本文化研究センター教授	出席
向井 清史	委員		名古屋市立大学大学院経済学研究科教授	出席
海津 正倫	委員		名古屋大学大学院環境学研究科教授	出席
芹沢 俊介	委員		愛知教育大学自然科学系生物領域教授	出席
辻本 哲郎	委員		名古屋大学大学院工学研究科教授	欠席
下田 路子	委員		富士常葉大学環境防災学部教授	出席
土屋 泰広	委員		(株)コンボン研究所取締役	出席
千頭 聡	委員	世話人	日本福祉大学国際福祉開発学部教授	出席
香坂 玲	委員	世話人	名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授	欠席
長谷川 明子		世話人	生物多様性アドバイザー	出席
広田 奈津子		世話人	生物多様性アドバイザー	出席
新海 洋子		世話人	なごや環境大学実行委員	出席
内木 哲朗		世話人	中津川市職員	出席
矢部 隆		世話人	愛知学泉大学コミュニティ学部教授	出席

< 事務局出席者 >

氏名	所属・役職等
山田 雅雄	副市長
小島 敏郎	名古屋市経営アドバイザー
斯波 薫	名古屋市環境局長
加藤 正嗣	名古屋市環境局顧問
小林 明生	名古屋市環境局理事
山口 一勝	名古屋市環境局環境都市推進部長
増田 達雄	名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室長

配付資料

- 資料1 生物多様なごや戦略の策定に向けた流れ(案)
- 資料2 戦略の位置づけについて(パワーポイント)
- 資料3 生物多様なごや戦略(中間案)
- 資料4 生物多様なごや戦略策定会議の構成
- 資料5 「第1回 しみん検討会議」報告(パワーポイント)
- 資料6 生物多様なごや戦略策定会議設置要綱

現在までの検討経過と今後のスケジュール

増田

(資料-1で策定に向けた流れを説明、資料-2について環境行政を創る環境戦略を説明)

小島

調査計画は数多いので、全体のわかる計画が必要である。

安田

市では市長のリーダーシップのできるので、やりやすい。

小島

制度上市長に権限があるのでやりやすい。

長谷川

環境局で内容の近い計画を集めてほしい。すると、次のステップが動きやすい。

「水と緑のナゴヤにしよう」のパンフレットの修正を希望する。有機野菜を食べるといのは入れてほしい。また、絵に夢のあるものを入れてほしい。

山田

小島さんの指摘は正しい指摘である。低炭素都市2050なごや戦略は環境局でまとめたが、全庁的な取り組みをした。総合的なものにするというスタンスであった。

芹沢

水の環復活2050なごや戦略では志段味の湧き水はどう決着が付けられたのか。総論はできているが、各論では問題が多い。

広田

市民と市長のリーダーシップが大切である。各論にメスをいれ、市民にリーダーシップを取らせるべきである。

安田

100箇所くらいホットスポットをつくり、そこを守る。それを最終案としたい。

戦略 第4章・第5章に示すべき事項

増田

p79から86について議論願う。左は、2050年のなごやのひと、右は取り組みを示す。

安田

戦略1から3のタイトルやキーワードはこれでよいか、皆のアイデアを出してほしい。

海津(p79)

40～50年だと時間間隔としてわかりやすい。2050年という数字は意にかなったものである。基本は身近に自然があること。40年ほかっておいたらなくなる里山など、身近な自然を残すよう、行政に反映させるよう市は意気込みを持ってあたってほしい。

安田(p79)

p79に身近なところに自然の恵みを残し、未来に伝える責務を入れるべきである。

下田 (p79)

「生物多様性」とは何か、わかりやすい説明が必要。共通認識無しに、安易に「生物多様性」という表現を使ってよいか。

下田 (p78)

「生物多様性」「身近な自然」を守るためにどうすればよいか、具体的に感じるができない。「まちづくり」にシフトしすぎでは。

向井 (p78)

都市戦略として、環境資源をどう産業化につなげていくのか、大きな視点が必要。生物に特化しすぎず「まちづくり」も進めるべき。都市経営まで言及してほしい。

千頭 (p79)

原風景(40年前)をイメージできるのは少数派。40年前を知らない世代がいる中でどう描くか。その世代が自分の体験として積み重ねることができるか。語り継ぐべき技術を持っている人が少数。郷愁に陥らないように。毎日の生活全てを組み立て直さないといけない。

そのような視点を取り入れないと、人づくりは難しい。

安田

向井委員にまちづくりの提案を願いたい。具体的なキーワードがほしい。

長谷川 (p79)

自然の危険性を意識しつつ、小さな冒険をする場がある。藪などが重要という文を入れるべきである。

向井 (p79)

「いのちのつながりを感じる」の「感じる」の部分が主体的でない。「いつくしむ」にすべきである。

安田

「感じる心を育て、伝える」

海津 (p83)

自然を身近に感じられるまちづくり、自然の価値を感じられるまちづくりを入れるべき

千頭 (p79)

子供主体に書き直す。語り継ぐではなく、50年後の子供たちは、里山や田んぼで遊びながら、知らないうちに生きものと触れ合っている。身近な農地でとれた食事を毎日とっている。という表現にする。

芹沢 (p78)

歴史は逆回りしない。40年前に戻すという発想は捨てるべき。

安田 (p78)

バックカスティングは現在からのイメージから発想するもの。なごや戦略は、逆ビジョン、すなわち、過去の事実を未来に活かすという発想である。

芹沢

40年前自然とともに生きてきたが、現在これを壊してしまった。そのような発想は絵に描いた餅では。

小島

(配付パンフレットの提案1と2の内容について説明)

提案1:空間的配置と交通手段(交通手段の変化と交通網の変化を盛り込むべきである)

提案2:気候変動の影響は不可欠(現在の気候で未来の名古屋の環境を検討するにはリスクあり)

提案3:名古屋以外の地域に支えられている大都市・名古屋(都市以外の地域の生物多様性への配慮をテーマに加えるべき)

提案4:生物多様性と学術・産業(生物多様性と学術・産業の観点は外せない)

提案5:具体的なプロジェクトの提起(バックキャスト手法を見据えて具体的な事業提案がほしい)

提案6:100年後・50年後のなごやについて、広範な提案活動を(大々的な提案活動を巻き起こし、これをなごや戦略の成果としてほしい)

加藤(p78、83)

地形・地質を活かしたまちづくりに改めることをベースに考えては。

内木(p78、83)

水を大切にす。水で繋がっている上流域には原風景が残っている。そこを体験の場とする。

安田

森・里・海の連関といっている。

長谷川(p79、p81、p84)

p79の三つ目の の1行目、自然の価値を実感し、それを活用している子どもたちがたくさんいる、という表現に。

また、p81の一番上の の1行目は、家庭&地域で野菜を育てているに、その下は、旬の食材に加えて、2050年のなごやでは、ほとんど有機食材になっているという表現に。

p84の2番目の で、「守るべき自然」を、「今守るべき自然」に。また、緑地をもっていることが得をする仕組み(例:酸素製造税)を示すとともに、なごやホットスポットを明記し、それを保全していく仕組みを示す。

新海(p79、p81、p84)

p79で主語がない。3つめの の最後の行で、何をあきらめるのか考えているは不要では。

芹沢(p79)

「たくさんの市民が…」を「たくさんの生きものが、我々とともに生きていることを知っている」という表現にすべきである。

身近な自然は中身が問題である。単に身近というだけでなく、多様な生物が存在することのすばらしさを知っているという表現にすべきである。

向井(p83)

国際貿易というのは、分業が前提のイメージで、他とトーンがずれるので削除したほうがよい。また、環境創造産業、環境を活用した産業をキーワードに入れるべきである。

土屋 (p77, p78)

2050年に落ちる前のキャッチフレーズが必要。50年後にこういうことです、ということを示すべき。どういふなごやをつくりたいのか。価値観を示すべき。

全体的に、「取り組むこと」の内容が安易である。具体的ではない。

新海 (p79, p83)

生物資源の恩恵を受けて生きていることを理解し、そういう社会をつくっていける価値観をもった人間を育てることを記載してほしい。

名古屋市近辺にある生物資源を素材に、地域の産業・地域経済がまわっていく。

千頭 (p83)

「瀬戸の山」を表現するなら、産業廃棄物をどう削減すべきかも示すべきである。

海津 (p84)

p84の1行目の の2行目は削除。開発をペースダウンしなくとも工夫はできる。

小島 (p84)

p84の1行目の の3行目は、具体的に示す。今あるものは保全をする。壊して戻すことはコストがかかる。残すつもりなら、今から残す。個別のイメージに当てはめて表現すべき。

加藤 (p77, p78, p79)

4章の最初に、課題や論点、3章までの総括、問題提起が必要。市民から集めた思いをランダムに羅列してあり、組み立てができていない。また、生きものに興味も知識も無いが、現に土地利用を改変している多数の人に対して、この程度はわかまえるべき、原則的なことを伝えることが大事。

「ひとづくりより」も「まちづくりから」入るべきでは。

「自然の恵みに・・・」は戦略の最初の表現としては、適していないのでは。

芹沢 (p83)

我々とともに、昔からこの地で生きてきた生きものを決定的に脅かさないことが大事。他の生物の生きる権利を決定的に奪わないことが、まちづくりの大前提。

千頭 (p83)

「決定的に」が曲解されないようにすべき。ちょっとは残っているから大丈夫、というものではない。

「決定的なダメージ」の前の、危険指標を書くべき。

矢部 (p78)

「生物多様性」を正確にイメージできる定義が必要。時間にそって分化した結果の多様性。語源に立ち返る。

まず人の生き方があって、その生き方を暮らしに反映し、それが集まってどのようなまちになるか。重要なのは生物多様性を認識し守るひとづくりをしてから、なごやのまちを考えるべき。「ひとづくり」から示す。

長谷川 (p79, p83)

p79に、「身近な自然を通して、遠くの自然にも心をはせることができる」を追加

p83の三つ目の の1行目は削除し、地域で活動している人が、50年後もいきいき楽しく活動しているという表現に。

安田

4章については、委員が各自持ち帰って後ほど事務局の増田さんに送ることにする。まだまだ内容がチープである。このレベルでは、不満足であり、もっと深みや含蓄のあるものにしたい。

期限は、2週間以内とする。

芹沢 (p86の1段目)

3つの戦略に示されたことは40年前にもあった。3つの戦略を実現するためには、40年前に無かったもの、欠けていたものが必要。それが拠点づくり。

ハコではなく、機能がまず必要。

環境情報を蓄積し、それを発信する体制がないと、長期的な戦略はたてられない。いきあたりばったりになる。40年前から今日までの歴史を繰り返さないため、さらに悪くしないために拠点が必要。

小島 (p86の1段目)

機能が発揮できるソフトが最初であり、その機能を発揮するにはどういうものが必要か。

矢部 (p86の1段目)

連携の仕組みづくり、具体的にどこをどうつないでいくか、そのために何が必要で、どのような役割を担うかなど研究が必要。

広田 (p86の1段目)

ショーケースに入れるのではなく、ホットスポットをつないで、そこに行けば何かに触れられる、学べるようなネットワーク作り。

加藤

市民が考える機能のイメージは 学芸員 収蔵庫 がなくて 展示である。

芹沢 (p86の3段目)

機能として一番重要なものは、「正しいデータベースをつくり、それをもとに情報を発信」すること。

正確なデータベースをつくるための手段として、学芸員が必要。

自然を把握するため、再現性を持つ情報の保存手段として収蔵庫が必要。

矢部 (p86の3段目)

収蔵の重要性を認識すべき。ハコモノを避ける意味で、収蔵庫も避ける議論にはなって欲しくない。市民参加の、ため池調査結果も集まっており、積み重なっていく標本もある。

長谷川 (p86の2段目)

骨も重要な財産。ストックし、還元できる仕組みが必要。市民が集めた収集物が他の都道府県に行くことが、本当によいのか。

小島 (p86の1段目)

建物は金、人は金ではなく機能の話。千葉県では、既存のものを組み替えて実現している。

矢部 (p86の2段目)

自分のまちの歴史を知り、誇りを持てる人づくりのため、拠点が必要(そういう人が少ないからつからないのではなく)

芹沢 (p86の2段目、3段目)

現在ある施設を活用すれば、大金がかかるものではない(大阪市自然史博物館は小学校跡地から)。できるだけ早く着手すべき。

正確な情報を蓄積し市民に発信することが、必要か、不必要かで割り切られると説明に窮する。

安田 (p86の3段目)

偏ったイデオロギーの集まった集団にならないように。レベルを保ち、市民と深い連携をもち、生物多様性を維持する拠点にすべき。

拠点をつくるという方向性は戦略に示すべき。

下田 (p78の2段目)

子どもが虫や植物の名前がわからないとき、聞きに行くことができる場所は必要では。生きものについて何かサポートしてほしいときに、何とかしてくれる場所としては、博物館が一番いいのでは。

広田 (p86の1段目)

開発時の調査結果の不整合や、街路樹への薬散布の影響などについて、専門家集団がチェックできるような体制であれば心強い。

5章について

増田

戦略1,2,3とあわせて、5章の事例があれば紹介いただきたい。

長谷川

5章については、パブコメで集める予定はあるか。

増田

パブコメで聞けるほか、委員からも紹介願いたい。

その他

千頭

p73、p74にしみん検討会議での100年後のなごやの姿を描いた。市民の意見は必要条件であるが、十分条件ではない。読んでいただければよい。p73、p74の絵にどう落とすかが課題である。

矢部

しみん検討会議の流れの中で、「生物多様性センター」勉強会を開催し、博物館で経験のある先生を呼び、議論する機会を設けたい。

新海

市内、県内の中小企業の社長が、地域で活用されていないバイオマス素材を使って、商品開発や製品開発をするミーティングをし、適正に、適量で、必要なものをつくっていくことが可能か、というところから議論を始めたい。